



第3章

校内研修活性化のポイントに 沿った具体的実践

長崎県教育センター

校内研修活性化のためのポイントに沿った検証

長崎県教育センターでは、小学校2校、中学校2校、特別支援学校3校の研究協力校とともに、本手引き書の第1、2章（理論編）で提案している「校内研修活性化のための五つのポイント」に沿った実践研究を2年間にわたって進めてきました。大規模校、小規模校、それぞれの特長を生かした校内研修の推進、校内に高い専門性をもつ職員が在籍している状況、様々な年齢層の職員で構成されている学校の状況を生かした校内研修の運営など、各研究協力校の特長、強みを生かした研究を行い、その成果について検証しました。皆さんの学校の実態や状況に応じて、第3章「実践編」をお読みいただき、必要とする情報の検索を行ってください。

1 研修過程を充実する

「学力調査を活用した学校改善・授業改善に有効なプランは？」

少人数の職員、少人数の児童、小規模校の特長を生かした課題の洗い出し

西海市立西海北小学校 第3章9ページ参照

学校改善・授業改善プランの有効性の追究は、課題の具体的分析から始まります。学力調査の結果や独自のアンケート調査等から課題を具体的に分析することが有効なプランづくりの第一歩です。

「年間を通じた研修の各過程で職員の研修意欲や課題意識を高めるには？」

職員間の合意形成を図る研修過程の工夫と充実

長崎県立ろう学校佐世保分校 第3章33ページ参照

全職員が研究の目的、達成のための手法、最終的なゴールの姿を、研究の各過程で確認し合い、協働して次なる改善に向かえるように、研修過程の工夫と充実を図ることが必要になります。

2 教育資源を積極的に活用する

「職員一人一人の専門性を引き出すには？」

内部講師を効果的に活用し、職員一人一人の専門性を引き出す研修

長崎県立盲学校 第3章27ページ参照

職員の必要感の高い研修テーマの設定や内部講師の活用、また、職員の特長を生かして各研究部の部員を構成することで、職員一人一人の専門性を引き出すことができます。

「自校の実態や状況から研究の具体を構想するには？」

内部講師の講義による研究内容の理解促進

長崎県立ろう学校佐世保分校 第3章33ページ参照

研究テーマについて共通理解を図り、研究の具体を構想し見通しをもつためには、研究開始時に校内職員が講師を務め、自校の実態や状況と研究テーマを重ね合わせて研修を深めると効果的です。

3 SGAを生かして組織力を高める

「教科部会や研究部会と全体会を効果的につなぐには？」

全教科共通の課題把握を出発点とした大人数の職員による協働研究

大村市立郡中学校 第3章15ページ参照

各グループで協議した内容に共通点が見出される中で研究の課題が明確になります。各部会の協議内容を開き合い、共通点を見出して、みんなで取り組むことを明らかにすることが大切です。

「教科の壁を越えて互いの授業を磨き合うには？」

授業の視点を定め、教科の壁を越えて磨き合う授業研究会

東彼杵町立千綿中学校 第3章21ページ参照

中学校で他の教科の授業研究会に積極的に参加し意見交換を活発に行うためには、全教科に共通する授業検証の視点を定め、視点に沿って授業研究会を行うことで授業を磨き合うことができます。

4 参画型研修で協働意識を高める

「全職員が自分の役割を自覚し、協働意識を高めていくには？」

職員一人一人の当事者意識が高まるワークショップ型研修

松浦市立福島小学校 第3章3ページ参照

様々な年齢層の職員が混在したチームを編制し、多様な意見や考えを出し合うなかで、職員一人一人が自分の役割を見出し、共に動こうとする協働意識が高まります。

「授業研究会を効果的に運営するには？」

大規模校の強みを発揮するグループ研究やワークショップ型研修の効果的実施

長崎県立佐世保特別支援学校 第3章39ページ参照

限られた時間の中で、より多くの職員が意見を出し合い、多種多様な意見が交わされるには、グループ協議の視点を明確にし、各グループの協議内容を効果的に開き合うことが大切です。

5 成果を可視化し、課題を共有する

「児童・生徒の変容から職員の研修意欲を高めていくには？」

国や県の学力調査と学校の独自調査を連動させた課題改善の分析と成果の可視化

松浦市立福島小学校 第3章3ページ参照

職員の研修意欲の高まりは、何と言っても児童・生徒の成長にあります。国や県の学力調査と併せて、学校独自調査の結果分析を定期的に行うなど、児童・生徒の成長が実感できるものがが必要です。

「授業改善の状況をどうやって確かめるの？」

改善の状況を確かめる評価問題の工夫と定期的な改善状況の点検

西海市立西海北小学校 第3章9ページ参照

一つの課題を様々な角度から確かめられる評価問題を作り、同じ課題の評価問題を時期をずらして何度も実施することで、研究の成果について可視化することができます。

次のページからは研究協力校の具体的実践です。各学校は五つのポイントの中から取組の重点を定め、実践研究を行っています。

学校の実態や状況に合わせて、重点ポイントを定めることも、校内研修の活性化を図るための大切なポイントです。



全教科共通の課題の把握からはじめる協働研究

大村市立郡中学校

＜校内研修活性化のためのポイント＞

③ SGA を生かして組織力を高める ① 研修過程を充実する

1 校内研修活性化における研究テーマの設定理由

(1) 今日の教育課題から

現行学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力等の育成が改善の方向性として示されている。特に、思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、観察・実験、レポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を発達段階に応じて充実させるとともに、これらの学習活動の基盤となる言語に関する能力の育成のために、各教科において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要があると指摘されている。また、生徒の学力向上のためには、授業改善が必要不可欠であるが、中学校においては、教科の壁があることで校内研修において議論が深まらないことにつながっている。そこで、全教科で行う言語活動を研究の中心に据えて取り組むことで、これらの課題を改善することにつながるものと考えます。

(2) 生徒の実態から

本校生徒の実態としては、素直な感性をもった生徒が多く、様々な活動に対して意欲をもって積極的に取り組む。また、授業における各教科の学習課題には主体的に取り組む生徒が多いが、全国学力・学習状況調査や長崎県学力調査、及び標準学力検査等の結果から、国語、数学それぞれの課題が明らかとなった。

そこで、国語、数学の課題は、他教科の課題でもあると捉え、全教科共通の課題を見出し、全職員で課題に直結した授業改善を図ることで、生徒の学力向上につながるものと考えます。

2 校内研修の歩み

(1) 校内研修活性化のためのRV-PDCAサイクル

月	H26	H27	研修内容 留意点	校内研修活性化のためのポイント
7月	R V		<u>学力調査から共通課題の設定</u> 全国学力・学習状況調査等の結果を基に、学力の課題を全職員で分析し、共通課題を見出すための研修を行った。 このことから、本校の重点課題「目的に応じて、情報を収集・整理・解釈し、根拠を明確にして自分の考えを書く・説明する」が明らかとなった。	① 研修過程を充実する <u>学力調査を基にしたリサーチ</u> ④ 参画型研修で協働意識を高める <u>ワークショップ型研修</u> 県教育センターより講師を招聘し、校内研修会を実施した。全国学力・学習状況調査等の結果から、本校生徒の課題等を教科の壁を越えて分析し、構造化することによって、全職員で課題を共有することができた。その際、学力調査の国語、数学の課題をヒントに自教科の課題を見出す参画型の演習を行った。各自が課題を書きだすことで自教科の課題として受け止めることにつながった。

8月	P	研究テーマの再検討 共通課題との整合性を図るために校内研修の研究テーマの再検討を行う。	①研修過程を充実する リサーチ→プランの再検討 ④参画型研修で協働意識を高める ワークショップ型研修 共通課題の設定後、研究テーマの再検討を行った。全員が参加して検討した課題を基に協議を行ったので、全職員が納得した形で研究テーマの設定を行うことができた。また、小グループでの協議を行ったことで、参加者からの意見が出やすく、校内研修に全員が参加しているという意識を高めることができた。
9月	D	具体策の実践 教科ごとに共通課題の改善につながる言語活動を設定した単元の洗い出しと授業検討を行う。	③S G Aを生かして組織力を高める 教科部会で共通課題に直結した単元設定 教科部会で話し合ったことで、共通課題の改善につながる言語活動の場面をさまざまな角度から出し合うことができた。
10月 ～ 1月	D	授業改善・研究協議 共通課題の改善に直結した授業づくりを行い、研究授業を行った。研究授業後の研究協議では、マトリックス法を用いた協議を行った。	④参画型研修で協働意識を高める マトリックス法 研究授業後の研究協議では、視点を示してマトリックス法を用いて協議を行ったので、意見が分散せず、視点に沿った協議を行うことができた。
2月 3月		先進校視察・報告 言語活動を取り入れた授業改善に取り組む先進校を視察し、報告会を実施した。	秋田県2校、神奈川県2校、埼玉県1校 (H26先進校視察 以上5校)
3月	C A	研究の振り返り ・研究の成果と課題の整理 ・研究のまとめ・次年度の計画	①研修過程を充実する 研究の振り返りと次年度の構想 本年度の研究を振り返り、課題を明確にすることで、次年度の研究の方向性を見出し、見通しをもった校内研修を行うことができる。
4月	R V P	研究組織、方向性の構築 研究推進委員会で、研究テーマ、組織編成、年間計画等の協議を行った。 全体の校内研修会で、研究推進委員会で協議した研究の方向性について協議した。 学力調査 全国学力・学習状況調査等（自校採点）	③S G Aを生かして組織力を高める 組織の活用 研究推進委員会で、全体会に提案する研究テーマや研究組織などについて、事前に協議するので、改善を加えた案を全体会に提案することができた。 ①研修過程を充実する R V - P D C A サイクル 前年度末に、前年度の研究の成果と課題を基に今年度の研究の方向性を構想していたので、順

5 月	C R V	学力調査の結果から課題分析 全国学力・学習状況調査を自校採点した結果及び県学力調査速報等から、本校の課題が前年度と同等であったので、「生きてはたらく思考力・判断力・表現力の育成～言語活動の充実をとおして～」という校内研修のテーマの下、継続して授業改善に取り組んでいくこととした。	調に年度当初の校内研修を運営することができた。 ④参画型研修で協働意識を高める 学力調査の結果から課題の分析と評価 全国学力・学習状況調査を自校採点した結果等を基に、ワークショップ型研修で学力の課題の分析を全職員で行った。この研修を通して、国数理の課題が自教科の課題でもあることを全員で理解することにつながった。
6 月 7 月	P	提案授業の計画 研究推進委員会で、推進委員の中から特定授業者を選出し、その授業を提案授業として研究を進めることとした。	③S G Aを生かして組織力を高める 提案者から提案授業を実践 研究推進委員が校内研究の提案授業を行うようにすることで、研究授業の年間計画を順調に行うことにつながった。
8 月	P	研究内容の検討 指導案形式検討や研究協議の方法、研究の視点の検討などを、授業研究部により提案し、全体会で検討した。	研究組織の活用 授業研究部より指導案形式を全体に提案することで、研究を組織的に進めることにつながった。
	P	共通実践事項の確認 共通実践として「めあて」と「振り返り（まとめ）」を意識すること、本校の共通課題の改善に有効な言語活動（特に「書く活動」）を取り入れること、既習事項の学びを意識することなどを確認した。	①研修過程を充実する 共通実践事項の確認 全職員で、校内研修で共通実践することについて確認することで、見通しをもって日々の授業や研究授業づくりを行うことにつながった。
9 月	C R V D	成果の検証 全国学力・学習状況調査の結果分析し、課題を確認した。 具体策の実践 教科ごとに研究授業を実施した。	④参画型研修で協働意識を高める 特定授業の研究協議では小グループを編成し、「マトリックス法」を用いて活発な意見交換がなされた。今後の研究を推進するにあたって一定の成果を得ることができた。 課題を克服するために、教科部会を充実させ、授業改善に取り組むことを確認した。

10月			
11月			
12月			
1月			
2月	C	具体策の実践	③S G Aを生かして組織力を高める
3月	A	計画に基づいて、教科ごとに課題に直結した研究授業を実施し、成果と課題の集約を行った。	小グループで研究協議 各教科の研究授業を実施した後は、小グループで研究協議を行い、授業参観後の記録をデータとして集約し、次年度に活かすようにした。
	R	本年度の研究のまとめ	①研修過程を充実する
	V	今年度の研究の成果と課題を全職員でまとめる。	研究の振り返りとまとめ 今年度の研究の成果と課題をまとめた。
	P	次年度の研究の方向性や目標、生徒の姿を意識した計画案を立てる。	①研修過程を充実する 次年度の研究に向けて 次年度の研究の方向性や目標、生徒の姿を想定することで、次年度の研究を順調にスタートできるようにする。

(2) 本校の特性（魅力と課題等）を生かした校内研修活性化のポイントの設定理由

○S G Aを生かして組織力を高める【校内研修活性化のためのポイント③】

大村市の指定を受けて研究に取り組んで2年目になるが、初年度は、これまでの研究にとらわれすぎで本研究のめざすものの焦点化に苦慮したところがあった。そこで、本年度は、昨年度の反省を活かし、研究推進委員会をより機能させ、一層研究を前に進めていくこととした。研究テーマや年間計画の検討に始まり、研究指定2年目の市教委計画訪問に向けて3部会の取組に重点をおいて取り組んだ。3部会部長を中心に、「授業研究部」では、指導案検討や授業の中で教科の壁を越えて共通実践できることを示し、各教科、各学年における言語活動の洗い出しを行った。「家庭連携部」、「学習環境部」も同様に研究推進委員会で協議して、それぞれ特色ある活動を行った。

計画訪問後、3部会での取組から本格的に授業改善に取り組むため、本年度後半は、各教科主任を中心に「教科部会」の充実を図って研究授業を実施し、その後の研究協議まで確実にやってきた。今後はさらに3部会と教科部会の両方が充実し、機能していけるよう、研究推進委員会で検討していくこととする。

○研修過程を充実する【校内研修活性化のためのポイント①】

本校の職員は40名おり、校内研修で全員が同じ方向を向いて研究を進めていくことは大変重要であるとする。以前は研究の方向性やゴールの姿を研究主任が案を示し、職員で協議を行って決定していた。しかし、全職員が理解し、納得して進められていなかったところが課題であった。そこで、研究の方向性や研究のゴールの姿を決定する際、全職員で本校の課題を把握する場を設定し、全員が意見を出し合うことで、全員が必要を感じながら研究を進めることができるものと考えた。

(3) 実践の振り返り

①全職員で取り組むこと

各種学力調査結果の分析と課題の設定を研究主任が行い、職員に提示し周知を図るのではなく、全職員が参加している場で課題を把握する演習を仕組み、課題を共有する場を設定した。このことで、職員一人一人が生徒の学力の課題を自教科のこととして考え、意見を出し合うことができた。そして、課題改善に関する言語活動の充実を図ることができる単元を洗い出し、各教科で一覧表にまとめた。研修を通して、生徒の知識や技能を身に付けさせると同時に、思考力・判断力・表現力の充実を図ること、つまり言語活動の充実を図る授業を行っていくことは、車の両輪として実践していくことが可能であることを全職員で共通理解することができた。そして、その後、各教科部会で本校の課題を改善するための言語活動を設定した授業を構想し、書く力や説明する力の向上を図るための手だてを考え、授業実践を行った。



また、授業参観時には、課題解決に向けて取り入れた言語活動が有効であったかという視点で、参観者の全てが授業参観シート(図)に記述することとした。さらに、事前に授業参観シートへの記述を参観者に確認しておくことで、参観者が本時の目標や本時取り入れた言語活動等、学習指導案に目を通し、内容を理解した上で授業に臨むことにつながった。このことで、教科の壁を越えて、授業研究会で意見を言い合えることにつながったものと考えている。

平成27年度 授業参観シート 大村市立郡中学校

参観の視点		評価
1	本時のめあてが明確になっていたか。 本時の目標を達成するために、取り入れた言語活動が適切であったか。	
2	良かった点	
	課題・疑問点	
	改善に向けての 助言・手だて	
3	本時の学習のめあてを振り返ることができたか。	

図 授業参観シート

②SGAで取り組むこと

本校では、全職員を授業研究部、家庭連携部、学習環境部の3部会に所属するようにし、生徒の学力向上を図ると同時に、全職員が校内研修に関わることを目指して取り組んだ。

○授業研究部では、言語活動の充実を図る授業実践を行うための研究

○家庭連携部では、家庭学習につながる教師側からの取組の研究

○学習環境部では、生徒会との連携による学習・生活習慣調査とその改善などの研究

以上のような取組を通して、生徒の学力の向上を目指した。併せて全職員がそれぞれの役割に応じて取り組むことで、校内研修への参画意識が高まった。また同時に、教科部会の活性化を図り、より一層の意識の向上を図っている。

③生徒の変容を見取ること

本校の課題改善のために言語活動を仕組んだ授業づくりを行い、授業を実践してきた。本校の課題（目的に応じて、情報を収集・整理・解釈し、根拠を明確にして自分の考えを書く・説明する）を改善するための授業が有効であったかを検証することが必要である。授業中のワークシートへの記述や授業終末での確認問題（県教育センターの活用教材等を参考）または単元テスト・定期テストでの類題の正答率の変容を見取ることなどに取り組んできた。授業後の生徒のアンケートからは、「説明する



というのは、少し苦手でしたが、補助ワークシートがあったことで、説明の仕方や方法をどのようにしたら良いのかが分かった。」「グラフのやり方と式のやり方の二つの方法がよく分かった。相手に説明することで自分もさらに理解できた。」など、書く力や説明する力を伸ばすための生徒への手だての有効性がうかがえた。

④実践研究のまとめ

本校の研究は、前年度、各種学力検査の結果から生徒の実態を把握し、その課題を共通理解することからスタートした。全国学力・学習状況調査の国語や数学に見られる課題が、全教科に共通するものだということが分かり、中学校の校内研究が活性化しない原因の一つであった「教科間の壁」を崩す研究の方向を確保することができた。

言語活動においても、話し合い活動だけでなく、様々な言語活動があり、それらを実践することが思考力・判断力・表現力を育成するために有効であることも共通理解できた。各教科、各学年における言語活動の洗い出しも、異教科間の連携と、各学年の系統性を把握することに役立つと考える。

今年度は、「教科の壁」を越え、本校の課題を全職員で共有し、学校全体で課題を改善する意識を高めるところから始めた。さらに、教科部会も活性化することで、学力向上をめざし授業改善に力を入れて取り組んだ。研究開始当初は、異教科間、同教科間問わずに授業について悩みを相談したり、効果的な実践方法を共有したり、指導案の検討を行ったりする場面が少なかったが、授業構想等について小グループで協議する機会を設けることで、教師間の連帯意識がより強くなり、本校生徒の課題解決のために全職員で頑張っていこうという職員室の雰囲気が高まっている。本研究のゴールをめざして、さらに校内研究を充実させていきたい。



共有視点による授業研究会の活性化 ～ＳＧＡとワークショップ型研修による授業実践力の向上～

東彼杵町立千綿中学校

<校内研修活性化のためのポイント>

- ③ＳＧＡを生かして組織力を高める ④参画型研修で協働意識を高める

1 校内研修活性化における研究テーマの設定理由

本校の生徒は、学習に対してどの学年も興味・関心が高く、学力をつけたいという気持ちをもっている。しかし、授業を実施するうえで、学級内での学習状況の差が大きくなっていること、特別に支援を要する生徒の割合が低いこと、自己肯定感が低いことに配慮する必要がある。教職員集団については協力体制ができあがっており、校内研修に意欲的に参加し、切磋琢磨しながら主体的に資質を向上させようという姿があった。反面、ほとんどの教科が一名ずつの配置のため、同一教科で高め合う機会が少なかった。そこで本校では、上記のような生徒の実態に対応し、教職員の教科の壁を越えるためＳＧＡやワークショップを活用した校内研修の実施を目指して、平成２６年度より校内研修活性化について研究テーマを「ＳＧＡを活用した教科の壁を越えた授業づくり」として研究を開始した。また平成２７年度は、授業力の向上のため共通した視点で改善を図ることを目指して、研究テーマを「共有視点による授業研究会の活性化～ＳＧＡとワークショップ型研修による授業実践力の向上～」とした。

2 校内研修の歩み

(1) 校内研修活性化のためのＲＶ－ＰＤＣＡサイクル

月	H26	H27	研修内容 留意点	校内研修活性化のためのポイント
2月	R		重点課題の設定 一年間の校内研修の成果とアンケート調査で見出した課題を整理し、次年度のテーマを検討する。	
3月	V		具体的方策の協議 学校経営方針を踏まえ、テーマを決定し、年間計画を検討する。	
4月		P	一年間の校内研修の計画・立案 ワークショップ型研修によって、生徒の学習面の実態を確認する。 昨年度の研究を生かして研究テーマ、年間計画などを作成する。	④参画型研修で協働意識を高める KJ法 →生徒全員の学力分析を行って実態を把握し、改善するにはどのような手立てが重要かについて意見を出し合い検討することで、改善策が明確となり、共通理解ができた。

5月	C	成果の検証① 生徒、教師の実態調査、保護者への意識調査を行い、変容を検証する。	④参画型研修で協働意識を高める アンケート調査を実施し、ワークショップ型を用いて昨年度のデータと比較することで、変容を明確につかむことができた。
6月	D	一年間の見通しの確認 校内研修計画を確認し、研究テーマと実践事項について理解する。	③S G Aを生かして組織力を高める 校内研修の年間計画の決定を受け、S G Aを組織した。
7月	D	授業改善の視点の理解① 県学力調査の結果を分析し、千綿中が目指す授業の姿を確認する。	①研修課程を充実する 県学力調査の課題改善のためのポイントを各教科から洗い出すことで、教科の壁を越えて育成する力について共通理解を図ることができた。
	D	授業改善の視点の理解② 標準学力検査及び通知表の結果分析を行い、指導案作成において配慮すべき事項を確認する。	①研修課程を充実する 標準学力検査の結果を分析し、県基礎学力検査と共通した課題を洗い出すことで、配慮すべき事項を共通理解した。
		授業づくり① 学習指導要領解説を活用し、何をできるようにするのかを分析し、何を学ぶかの絞り込みとどのように学ぶかの検討を行い、「授業を磨く教師」に合わせて指導案を作成する。	③S G Aを生かして組織力を高める S G A内のD－C A Pを生かした授業づくり① 学習指導要領解説の読み取り方や「授業を磨く教師」の解説を行うことで、めあてとまとめの重要性と指導案の書き方を再確認できた。
8月	D	授業づくり② 「授業を磨く教師」を指導案の型にして、学習指導要領解説を読み込み、身につけさせる力を明確にし、学習内容を絞り込んで授業構想を練り、指導案を作成する。	③S G Aを生かして組織力を高める S G A内のD－C A Pを生かした授業づくり② S G Aを活用し、「授業を磨く教師」を共通の視点として協議を行うことで、思考力・表現力・判断力の育成に向けた指導案作成に取り組むことができた。
9月	C	授業改善の視点の理解③ 全国学力・学習状況調査の結果分析から本校の課題を洗い出し、教科の壁を越えて共通実践できる視点を確認する。	①研修課程を充実する 生徒の変容を見るため同一学年の県基礎学力調査と同一問題を分析し、「与えられたグラフを事象に即して解釈し、問題解決の方法を説明する」といった課題を明らかにすることで、共通実践の視点を明確にした。

10月	D	研究授業の実施① S G Aの一人が研究授業を行い、全職員を対象に研究授業を行う。授業後は、S G Aで成果と課題を整理する。	③S G Aを生かして組織力を高める S G A内のD-C A Pを生かした授業づくり③ 「本時において検証すること」について授業を深く理解したうえでS G Aで評価を加えることにより、授業研究が深まった。
	D	研究授業の実施② 前回のS G Aメンバーの研究授業の反省を生かして指導案を修正し、研究授業を実践する。	③S G Aを生かして組織力を高める S G A内のD-C A Pを生かした授業づくり④ 明確になった課題をもとにS G Aメンバーで指導案を検討し、修正した。
	C	成果の検証② すべての研究授業終了後に校内研修を行い、授業について共通した視点を示して検証を行う。	④参画型研修で協働意識を高める マトリックス法 →授業改善のための共通の視点に関して、授業V T Rを視聴しながらワークショップを活用して評価を行うことで、成果や新たな課題を確認することができた。
11月	C	成果の検証③ 生徒、教職員への実態調査、保護者への意識調査を行い、結果を分析して、改善点を検討する。	④参画型研修で協働意識を高める SWO T分析 →生徒・教職員の良い方への変容と改善が不十分な点について検証を行うことで、強みと改善点を洗い出すことができた。
12月	A	さらなる授業改善 研究授業の成果と課題を発表し、今後の授業のさらなる改善を図る。 全国学力調査での課題に対して改善を図り、再度検証する。	①研修過程を充実する S G Aで分析してきた調査結果について発表し合い、模範授業を見ることによって自己の授業力向上に向けて具体的な改善点を整理することができた。
1月	A	成果の検証④ 標準学力調査の問題を活用して、重点課題の改善状況をみる。	
2月	R	次年度の計画を作成する。	
3月	V	次年度の研修テーマ、年間計画を検討する。	

(2) 本校の特性（魅力と課題等）を生かした校内研修活性化のポイントの設定理由

○S G Aを生かして組織力を高める【校内研修活性化のためのポイント③】

本校の校内研修では、年代に関係なく意見交換ができ、建設的な議論を行うことができていた。その反面、ほとんどの教科が一人の配置になっているため、同一教科での授業づくりを行うことができなかった。そこで、高い向上心をもつ教職員集団を生かして異なる教科でグループを組み、互いを授



業改善の助言者として研修を行うことにした。

○参画型研修で協働意識を高める

【校内研修活性化のためのポイント④】

本校は授業を行う教職員数11名と小規模であり、校内研修においては自分の考えを活発に述べ合う集団であった。ただ、論点がずれることもあり、深め合い高め合う校内研修の実施が課題であった。そこで、KJ法やマトリックス法といったワークショップの手法を活用し、授業改善の視点を定めて意見が深まるよう工夫した。



○研修過程を充実する【校内研修活性化のためのポイント①】

本研究においては、学力のデータとして、全国学力・学習状況調査、県学力調査、標準学力検査の三つを活用し、教科を超えて改善すべき点（学力の二極化、思考力・判断力・表現力の育成）を明らかにし、この課題に対する手立てとして、「分かる授業の構想」（めあてとまとめの連動、つまずきへの手立て）、「根拠を明確にして表現する」を挙げ、研修を充実させていくこととした。また、授業改善の視点について、生徒、保護者、教職員に定期的にアンケート調査（図）を行って変容をとらえ、研修過程の充実を図った。これにより授業改善を個別の教科の課題とせず、学校全体として取り組むべきものであるとの認識をもつよう促した。

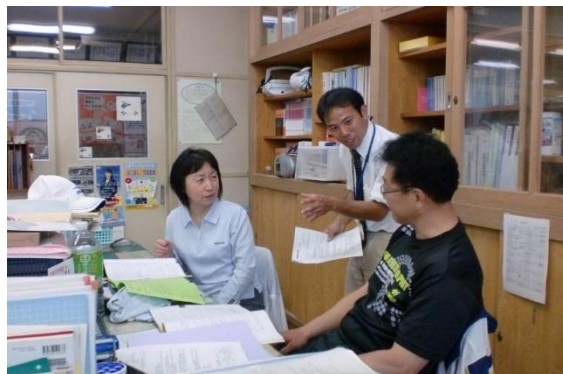
生徒用アンケート		教師用アンケート	
生徒氏名		氏名	
【ねらい】 千綿中学校では、4月より何度も職員研修会を行い、わかりやすい授業を目指して工夫してきました。これまでの取組を分析することにより、今後に向けて取り組むべき課題について考える機会とします。下のアンケートに協力をお願いします。		【ねらい】 これまで研修で学んだことを基に、自分の授業力を見直し分析することにより、今後に向けて取り組むべき課題について考える機会とする。	
評価 4 とてもあてはまる 3 あてはまる 2 あまりあてはまらない 1 あてはまらない 場面 評価項目 評価		授業について (5:よくあてはまる 4:あてはまる 3:まあまああてはまる 2:どちらかといえばあてはまる 1:あてはまらない) 評価項目 評価	
① 意欲的に授業に取り組んでいる。 ② 意欲的に家庭学習に取り組んでいる。 ③ 現在、授業の学習内容は理解できている。 ④ わからないことがあったら、授業中、休み時間、昼休み、放課後などに、先生に質問している。 ⑤ 授業の初めに示される「めあて（ねらい）」を意識して、授業を受けている。 ⑥ 黒板に示される「学習の流れ」を確認しながら授業を受けている。 ⑦ 班活動などで、自分の意見を発表して考えを深めている。 ⑧ 授業の最後に本時のめあてが達成できたが確認している。 ⑨ 質問したら、先生はわかりやすく最後まで教えてくれる。		① 学習指導要領解説を基にしながら、指導単元や本時で育成すべき力は何かを見つけ、授業を構想している。 ② 教材を分析し、教材のもつ価値や指導内容を明らかにしている。 ③ 本時の学習に必要な知識や能力について、既習事項の習得状況を使って一人ひとりの実態を把握している。 ④ 単元に身に付けさせたい力を、つまずきの予想や指導観と連動させている。 ⑤ 目標を評価から捉え、評価規準を設定し、本時のねらいと連動させている。 ⑥ 1単位時間の授業で教えるべきことを絞り込んでいる。 ⑦ 生徒のつまずきを予想し、手だてを考えている。 ⑧ 規準に達した生徒に対する手だてを考えている。 ⑨ 思考力、判断力、表現力を育成する言語活動を組み入れている。 ⑩ 根拠や理由を明確にして自分の考えを表現させる場面を設定している。	
保護者アンケート 評価 4 とてもあてはまる 3 あてはまる 2 あまりあてはまらない 1 あてはまらない 場面 評価項目 評価		一単位の授業について ① 導入において、本時の学習に必要な既習事項の確認をしている。 ② 学習意欲を引き出すめあてを伝え、板書している。 ③ 本時の学習の流れを黒板に示し、学びの趣意を明確にしている。 ④ 活動場面において、学習のめあてを忘れないような指示をしている。 ⑤ 授業の途中で、課題の達成状況を確認することができる。 ⑥ 授業での生徒のつまずきに応じた、手だてを講じている。 ⑦ 理解が十分な生徒に対しても、さらに思考が深まるような課題を与えている。 ⑧ 班活動などで自分の意見を発表させ、考えを深めたり、自信をもたせたりしようとしている。 ⑨ 授業の最後に振り返りやまとめの時間を設定し、評価問題や確認問題等を活用して本時のめあてが達成できたが確認している。 ⑩ 授業の問題点を整理し、次時の授業構想を組みなおしている。	

図 アンケート調査

(3) 実践の振り返り

①教師の授業力の向上について

本研究を実施するにあたり、授業づくりの資料として「授業を磨く教師」と「学習指導要領解説」を用いた。当初は解説の読み取りに手間取り、本時に身に付けさせたい力の分析や学習内容の絞り込みがうまくできず、めあてとまとめの連動が図れないなどの苦労が見られていた。SGAでの指導案づくりに研究主任が入ることによって適時助言を加え、授業構想力の向上を促した。小グループの研修によって、授業者の個別の課題へ対応し、「授業を磨く教師」などを用いて具体的に議論を進めることで授業を見る視点が鋭くなり、研修を重ねるごとに的確な議論ができるようになった。また、研修時間以外にも授業構想について職員室で議論が交わされるようになるなど、意識が大きく向上した。



②全国学力・学習状況調査の分析より

全教科で「根拠を明確にして表現する」ことに取り組んだことにより、全国学力・学習状況調査国語B問題では、「資料の提示の仕方を工夫し、その理由を具体的に書く」の正答率が全国より10.5%、「文章の構成や展開などをふまえ、根拠を明確にして自分の考えを書く」の正答率は全国より30.0%、国語B全体の正答率でも全国より10.1%高いという結果になった。

また、数字が小さいほど平均とのばらつきが少ないことを表す「標準偏差」の値を、長崎県や全国の値と比べると、次のような結果となった。

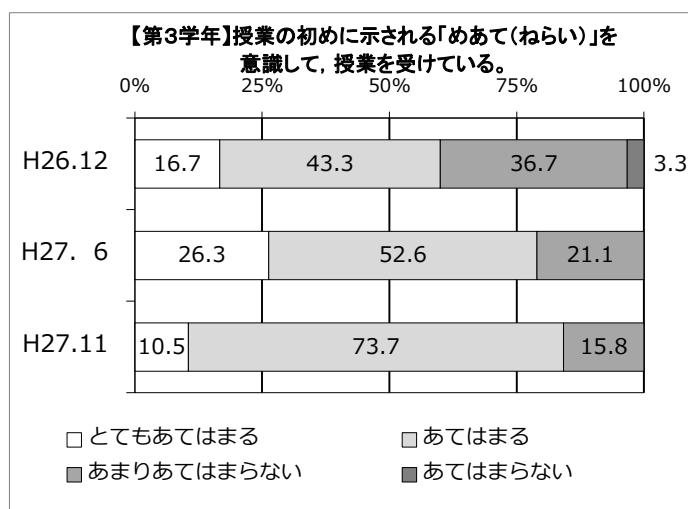
【標準偏差の比較】

国語A：県-5.4、全国-0.6 国語B：県-0.4、全国-0.5
 数学A：県-0.7、全国-1.0 数学B：県+0.2、全国±0

このように、本校の課題であった成績の二極化が改善の傾向にあることがわかった。標準偏差の長崎県や全国との値の差は、以下のとおりである。

③アンケート調査結果より

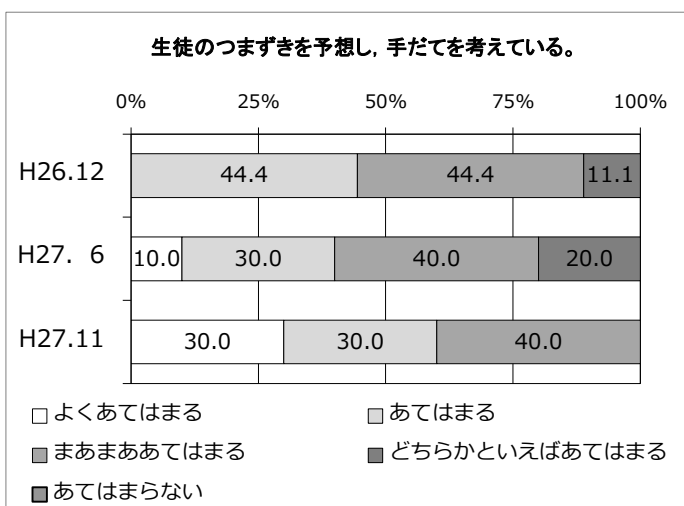
平成26年12月のアンケート調査で「めあてを提示している」と回答した教師は全体のおよそ9割に対して、研究対象であった現第3学年で「めあてを意識している」生徒は60%と、教師と生徒の意識の差は非常に大きかった。平成27年11月では「めあてを提示している」教師90.0%に対して、「めあてを意識している」生徒は84.2%と、意識の差が埋まってきている【グラフ1】。



【グラフ1】

また、平成27年11月における教師アンケート調査では、「生徒のつまずきを予想し、手立てを考えている」という項目の回答でも、大きな改善が見られた【グラフ2】。

これらのことは、昨年度からの研究対象である現第3学年の、平成27年11月における調査項目「意欲的に授業に取り組んでいる」で、100%の生徒が「とてもあてはまる」または「あてはまる」と回答していることから、生徒の学習意欲向上にもつながったものとする【グラフ3】。



【グラフ2】

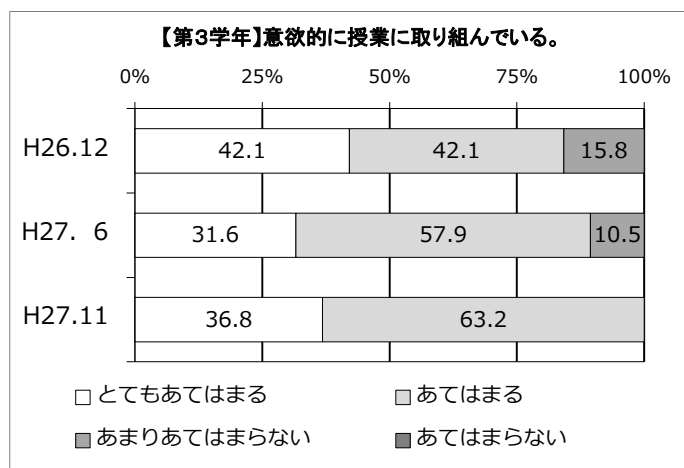
④実践研究のまとめ

校内研修を重ねていくごとに、教職員の意識が学力に向くようになり、これまで各自の努力と工夫によって行われていた授業改善が、「授業を磨く教師」や学習指導要領解説という共通した基準に合わせて行えるようになり、質的な向上が見られるようになった。授業研究会では、検討すべき視点が定まっていることですべての話合いでポイントを絞った議論を行うことができた。

S G Aを生かして組織力を高めることをテーマに取り組んできたことで、より深い授業づくりができるようになり、さらに教職員の意識の統一を図ることができ、全教科が同じ手法で改善を行い、生徒が授業を受けやすくなったという利点もあった。

ワークショップを活用した参画型研修では研修の深まりを生むだけでなく、考えを開き合うことで、教職員が互いに高め合う雰囲気づくりに貢献しており、学校全体にまとまりをつくり出していた。

さらに、研修過程を充実する資料としてアンケート調査を行ったことで、教職員が自己の実践と生徒の実態を比べることができるようになり、学力の問題点を生徒の努力不足にしがちであった考え方を改め、客観的に授業を振り返るようになってきた。R V - P D C Aを意識した取組は、「授業改善」に向けた重要な取組であることがわかった。



【グラフ3】

校内研修の手引き～実践編～

校内研修活性化のためのポイントに沿った具体的実践

平成 2 8 年 3 月発行

編集・発行 長崎県教育センター

〒856-0834 大村市玖島一丁目 24-2

TEL 0957-53-1186（企画課）
